

一九七七・四。

(6) 西宮一民「古事記の成立——偽書説批判および原古事記の比定——」

〔古事記の成立〕倉野憲司他著、大和書房、一九七七・六。

(7) 「多分一字であらう」(武田祐吉『国文学研究・柿本人麻呂歌』一九四三・七、大岡山書店、四三頁)。

四、都市の成立と歌

——歌垣の衰退に絡んで——

一

最近、古代文学の生成に關わって都市の成立の問題に着目する、新鮮な二つの論考がおおやけにされた。一つは古橋信孝「古代詩論の方法試論」第V章の二「都市の成立」と題されている⁽¹⁾であり、いま一つは中西進「万葉集と都市」⁽²⁾である。前者は初期万葉期における都市の萌芽形態に注目し、都市の成立による共同体及びその祭式の崩壊に伴なうところの、個の意識の成立、国家という大規模な擬制的共同体に關わる思考の抽象化、宮廷の奥深くに秘儀化される祭式によって、それと分離し自立する宴、その場における歌の文芸化等々を、当該問題の俯瞰的見取図として、論理的に提言する。一方後者は、平東京の成立とともに普及する通貨の問題にまず注目し、通貨の成立による自然的生産物に即応する物質的な価値意識から抽象的な価値意識への転換を説き、自然性・農村性に対する社会性・都市性の優位化と奈良朝万葉歌との連関に言及する。そしてさらに、そうした都市性を光とする傍らに、影としての自然性・農村性

(8) 藤井「フルコトの一研究」(『共立女子短大文科紀要』二二、一九七八・二)、参照。

の存在を見て、その光による影の中に、万葉和歌の生成の秘密をさぐろうとする。

両者は、古代都市の形成の問題を、文学の生成の問題に結び合せてみた点で、これまでになかった新しい視座を提供する論考であったとみなければならぬ。前者の古橋論考は、旧来、古代的共同体の解体過程と文学形成史との関連(多くは抒情歌形成史との関連)として、抽象的に論理だてられてきた問題に、〈都市〉という概念を持ち込み、中央集権的な国家形成史と文学形成史との関連を具体的に論ずる手がかりを提示してみせたもので、具体的な作品との関わりは捨象したもの、原理的にはきわめて高い有効性を持った提言であった。一方後者中西論考は、通貨に關する指摘から始まって、終始、万葉歌という具体的作品に近寄ったところで論を展開させている結果、ついに都市性の中に影として存在する過去の自然性・農村性といったものを引き出し、文学生成の屈折した微妙な深層に言及することを得ている点、文学論的に、きわめて高いレベルの問題に迫るものであった。

森 朝 男

四、都市の成立と歌

これら二論は、もとよりそれぞれの論者の関心や主題の設定のしかたや姿勢など、互いに別個のものであって、両者を対比したり、まとめたりすることは、ほとんど双方の個性を無視しないしは捨象してしまいかねない。安易な要約は誠に慎まなければならないが、最少限、両者が古代における文学生成の基盤として、古代都市の問題、ないしはその形成の問題を考えている点において共通しているだけは、言っても許されるだろう。したがって両者の姿勢は、すでに文学の環境の問題として都市を扱うといったふうな次元を、はるかに超えてもいるものである。両者を共通して支えているものは、それぞれ別個の個性を持ちつつも、文学の生成する神秘に肉薄しようとする盛んなる採求心であったことに、疑いはないであろう。そしてその場合に古代都市をどうとらえるかといった点で、これを都市社会以前の生産的村落共同体から切れた都市生活者の出現に焦点化してゆこうとするところでも、両者は相寄る性格を持っていると言えらる。

実のところ、古代都市の成立をめぐる真に歴史的な課題はこの点を措いてはかになく、いかなる枝葉の論もこれを核として以外に論ずることを得ないはずであり、古代文学における古代都市の問題についても、全く同様であると思われる。歴史学の領域における古代都市研究でも、近年、考古学的調査にもとづく復元的研究の域を脱して、右の如き社会構造の変革の問題として、古代都市を考える試みがなされはじめている。

二

本稿では、基本的には右のような視座を前提としながら、都市の

成立による歌垣の変容・褪色という座標軸を立ててみようと思う。歌垣は発生的に見ても生産的村落共同体社会と不可分な存在のしかたを続けてきているはずであるから、都市の成立は当然にこれを解体にむかわせたはずであったと想像される。

伴雄の郡。波比具利岡。此の岡の西に歌垣山あり。昔者、男も女も、此の上に集ひ登りて、常に歌垣を為しき。因りて名と爲す。(撰津国風土記逸文)

奈良朝の初中期の段階で、畿内撰津国において、たとえば歌垣はこのように記憶の中にある。比較的に都に近い地方で、このように過去のなものととして歌垣が描かれているのは、滅びゆく歌垣の貌を語っていると見てよいであろう。同じ頃、各国で編纂されていた風土記の中には、たとえば常陸の筑波山その他、肥前杵島山等々について、歌垣の盛行を記していて、中央から隔った鄙辺には、なお歌垣を持続させうる社会的基盤が残存していたことを伝え、生産的村落共同体の解体過程の地域差が現れていることを想像させる。ただし、杵島山については「郷間の土女」の参集を言う(肥前国風土記逸文)のに対し、筑波山については「坂より東の男女」の参集を言う(常陸国風土記)。「坂」は足柄峠であるにしろ碓氷峠であるにしろ、かなり広域に亘っての人々の参加を意味していて、筑波山歌垣の特殊性を考慮する必要があると感じられる。が、このことはいま詳述しえない。

歌垣の褪色の事情を、最も具体的かつ雄弁に語っているのは、以下のような記録類であろう。

1 太政官符／禁断兩京畿内踏歌事／右被_レ右大臣今月十四日宣_一備。奉_レ勅。今聞。里中踏歌承前禁断。而不_レ從_二捉搦_一猶有_二濫

四、都市の成立と歌

行。敵加禁断不_レ得_二更然_一。若有_二強犯_一者追捕申上。／天平神護二年正月十四日（類聚三代格卷十九）

2 太政官符／禁_二制_一兩京畿内夜祭歌舞_二事_一／右被_二右大臣宣_一傳。夜祭会飲先已禁断。所司寛容不_レ加_二捉搦_一。遂乃盛供_二酒饌_一。行事_二醉乱_一。男女無_レ別上下失_レ序。至_レ有_二斗争_一間起_二淫奔_一相追。違_レ法敗_レ俗莫_レ甚_二于茲_一。自今以後敵加_二禁断_一。祭必_二昼日_一不_レ得_レ及_二昏_一。

（中略）／延曆十七年十月四日（同右）

3 太政官符／禁_二断_一会集之時男女混雜_二事_一／右被_二大納言從_一三位神王宣_レ傳。奉_レ勅。男女有_レ別。礼典彙倫。品類無_レ差。名教已闕。如聞。黎庶愚闇不_レ識_二礼儀_一。所司寛容曾无_二誨導_一。公私会集。男女混濁。敗_レ俗傷_レ風莫_レ過_二斯甚_一。宜_レ敵禁断勿_レ令_二更然_一。知而

有_レ違刑_レ故無_レ有_二。勝_二示路頭_一。普令_二知見_一。／延曆十六年七月十一日（同右）

4 凡京都踏歌。一切禁断。（延喜式卷四十二）

右のうち1と4に「踏歌」とある以外は、かならずしも歌垣を指したのではないが、間接的な参考資料とするに足る。歌垣ははじめ何らかの神事、祭式的意義を背負うか、または神事祭式に附帯するものとしての意味を背負って形成されたものであろうが、次第にカーニバル的な狂躁の風俗と化し、いわば民衆の潜在的狂躁性の発露形式として、都市社会内部にも沸騰してくる、といったことがあったのであろう。政府の右の如き処置はそれへの対応であったと思われるが、右の1、2、4が、「兩京畿内」「京都」というふうな地域を限定して、良俗を破るそうした風俗の禁断を言っているのはおもしろい。

このことは歌垣が本質的に村落共同体的体制のうちでのみ、調和

的に存在しうる性格のものであったことを語っている。比較的に見て、共同体の解体・変容の著しかった京師周辺、畿内地方では、歌垣は衰退ないしは変質しやすく、またそれを結果的に促進するものとして、右のような禁制も加えられたのであろう。これらの地域における経済的・人的流通の構造の、他地域に比しての先進性は、想像に難いことでない。

しかし一方では、まさしくその経済的・人的流通に関わる市において、歌垣の行われたらしい様子を見落すことはできない。大和軽の市、同じく海石榴市、あるいは駿河阿倍の市などにおける歌垣の存在を語る資料がある。市はおそらく、いわゆる広場としての役割をも担ったであろう。したがって、ここで祭祀が行われることがあったにしても、それは本来的であるはずはなく、市は基本的には行事的会集の場であったと見てよい。そうした市での歌垣は、第一にもはや神事との関わりを稀薄にしている、その営み自体が強い神事的意味性に貫かれて存在するというものではなかつたろう。そして第二に市はしばしば交通の要衝に存したから、他の土地の者も加わりうるといった、開かれた歌垣となつたであろう。

これら第一と第二の事情は、市の歌垣が歌垣の根拠や調和をうちやぶる性格のものであつたろうことを感じさせる。したがってその存在は、危い混乱をいつも孕んでいたと思われ、上記の禁制に示されるような新しい周囲の動きを受容して、変貌や衰退を余儀なくされていったであろうと考えられる。

大和地方の歌垣のうち、少なくとも軽の市の歌垣は、そうした傾向を見せているといえる。「允恭記」の木梨軽太子・大郎女の悲恋物語が、主人公らの名や、含まれた歌謡などにおいた、軽の歌垣と

の連関を思わせながら、いわば隠り妻伝説として、軽の地に関する固定化した共同観念によりかかりながら発想されているらしいのははじめとして、人麿の軽の妻挽歌（2・二〇七・九）や

天飛ぶや軽の社の斎槻いひのり幾代まであらむ隠り妻そも（11・二六五八）

の如き歌など、みな歌垣の場としての軽が、歌垣にもなつて発生する隠り妻というもののゆかりの地と観念され、なかば物語的な虚構性を帯びて歌い出されるのであった。こうした傾向には、もとより軽太子物語の影響といったものが想定されなくはないが、そうした観念に先行された歌ばかりがあつて、現実の歌垣の場の様子を思わしめる歌の少ないのは、軽の歌垣が、すでに早い時期に伝承世界に封じこめられた、過去の的なものとなつていたことの証拠ではないのか。

前引摂津国雄伴郡歌垣山の例とともども、都市周辺部の歌垣は、こうしておそらく万葉の前期から中期にかけての段階において、すでに過去の的なものとなりつゝあつた、と見てよいのではないかと思われる。

これに対して、村落の共同体社会の崩壊が比較的ゆるやかであつたと思われる地方、ことに最後進地域であつた東国の場合などは、こうした点について、事情がかなり異つていたようである。事情は、たとえば常陸国風土記が、やや特異な筑波山の歌垣の例を除外するとしても、かなり多くの歌垣関連記事を載せていることによつて、最も雄弁に物語られている。

三

かつて、古代の民衆世界における恋と恋歌との問題を考えた機会(3)

に、次のような対比を試みたことがある。

君待つと吾が恋ひをれば吾が屋戸やどの簾動かし秋の風吹く（4・四八八、額田王）

玉垂れの小簾すだれの隙に入り通ひ来ねたらちねの母が問はさば風と申さむ（11・三六四、未詳、古歌集）

現世このよには人言繁しげし来む世にも逢はむ吾が背子今ならずとも（4・五四一、高田女王）

他言たごの繁しげきによりて真小麿まこの同じ枕を吾は枕かじやも（14・三四六、東歌）

前者においては風と簾、後者においては人言という語が、それぞれ対比される二歌に共有されている。しかしながら同じような素材によりながらも、この二組それぞれの右側の歌と左側の歌とは、決定的に異つている。その異りは、二組ともどもに、右歌が逢えないことの嘆きに傾斜するのに対し、左歌は逢うことを歌おうとしてい

る点にある、と言ひ当てることができよう。そしてともに右歌は貴族の歌であり、左側は民衆世界の歌であつたとして、おおよそ誤らないと思われるのであつた。

ところで右二組のそれぞれ左側の歌のように、逢うことまたは逢うことの喜びを歌おうとする恋歌は、万葉集中、明らかに東歌に偏在する。その一端を掲げよう。

多摩川たまたがに曝さらす手作りさらさら何そこの児のここだ愛かなしき（14・三三七三）

上毛野かみけの安蘇やすその真麻ま群むらかきむだき寝れど飽かぬをあとか吾がせむせむ（同、三四〇四）

高麗こま錦にしき細解こまき放はなけて寝るが上にあとせるとかもあやに愛かなしき

四、都市の成立と歌

(同 三四六五)

赤見山草根刈り除け逢はすが上あらそふ妹しあやに愛しも(同三四七九)

麻笥らを麻笥に多に續ますとも明日着せさめやいざ為小床に(同 三四八四)

以上の歌々は、共寝を歌つて赤裸々な性愛の表現に致つたものをも含みつつ、総じて逢い難いことの嘆きに沈んでゆこうとする抒情詩的恋歌とは、明らかに異つた特色を有している。

東歌にどうしてこのような種類の歌々が集中するのか。おそらく、それはこれらが短歌形式をとりつつも、当時の短歌形式一般の傾向に背反する、それとは別な種の歌の世界を、強力な土壌とされているからに相違ない。その土壌とは、おそらく集団歌謡の世界であるにほかならず、しかもその集団歌謡の生命を保証する最大の場が歌垣であった。歌垣に歌舞の伴なつたことは、例を挙げるまでもなく諸国風土記の歌垣関係記事にそのことが頻出することによつて、知られる。おそらくそうした場の歌の中には、場が場だけに、性愛の喜びを歌つたものが多かったらう。男女のかけあいの歌もまた、そうした傾向を帯びやすい、即興歌を多く含んだらうと思われ

る。

こうした歌垣の場は、いわゆる集団的歌謡が生成し、また歌われてその生命を持続させる場であった。万葉の時代に入って、東国はなお最もそうした歌垣の盛んに行われる地域でありえ、畿内地方はそうでなくなりつつあった。東歌に対応させて、巻十一、十二の作者不明歌群の中に右の歌群と同じような傾向を持つ歌を求めようとすると、にわかに著しい困難を感ずる。

山城の久世の若子が欲しといふわれあふさはにわれを欲しといふ山城の久世(11・三三六二、人聲歌集)

人妻に言ふは誰が言さ衣のこの紐解けと言ふは誰が言(12・二八六六)

海石榴市の八十の衢に立ち平し結びし紐を解かまく惜しも(同二九五)

など数首の歌に、かろうじて近い傾向を察することができるが、右のうち第二首などは、すでに禁断への強い意識を表白するものとなっており、また第三首も、海石榴市の歌垣に何らかの関連を持つ歌ながら、むしろ「解かまく惜しも」の抒情性を中心に置いたものとなっている。

東国世界と畿内世界とは、すでに歌を支える情念の基層が、かなりに異ってきているのだと言えよう。その差異の因由は、歌垣という集団歌謡生成の基盤の強弱にあった、と推断することが許されるであらう。歌垣は、統日本紀天平六年二月一日条、同宝龜元年三月二十八日条の記事の如く、一方で都市空間のただ中に擬似的に再現させられた例(天平六年のものは平城宮朱雀門前、宝龜元年のものは河内由義宮)を持つが、それらにあっては、男女二百数十人という多きが参加、「男女相並、分行並進」「以本末唱和」などと、形式的には地方歌垣にも近似した面目を整えながら、歌そのものは宮廷の雅曲の類とおぼしいものであったり、また「古詩」と記される(宝龜元年条続紀)ように過去性のものであったりする。もはやそこには、歌謡生成のいきいきとした息吹きはない。都市の歌垣は、禁圧されるものでなければ、このように徹底して様式化された、擬態のものとして再現されるはかになかった。

東歌の特異性は、このように考えてみると、なお盛んなる歌謡生成を背景に有した、特殊な後進地域の歌であることになるであろう。しかしながら、それが二百三十首うちそろってみな短歌形式であることに、一方で注目しておかねばならない。

(14・三三九〇)

吾が恋は現在も悲し草枕多胡の入野の将来も悲しも(同 三四〇三)

しまらくは寝つつもあらむと夢のみにもとな見えつつ吾を哭し泣くる(同 三四七二)

楊こそ伐れば生えすれ世の人の恋に死なむを如何に為よとそ(同 三四九一)

青嶺ろにたなびく雲のいさよひに物をそ思ふ年のこのころ(同 三五一一)

東歌の中には、すでにこのように、抒情歌としての、かなりの程度の風格を具えた歌々が散見している。そしてこれらのほかにも、中央の歌人の歌と類歌関係にあるもの、人麿歌集の歌と記されて抒情味の強いものなどがあり、中央の歌の伝播・影響は、おおうべくもないのである。短歌形式は抒情歌に傾斜しつつ、すでに東国の集団歌謡の世界をも浸蝕しつつあった、と見てよいであらう。同じ頃平城京内では、短歌形式に著しく牽引された歌体を持つ集団的歌謡として、仏足石歌が作られもしていたのである。

四

歌垣の褪色・衰微という視点は、あるいはあくまで集団歌謡の生

命力の衰退を語るのみのものであって、和歌的な歌の形成を語るには逆説的で、負の側からの語り方であるに過ぎぬ、という批判を受けねばならないかも知れない。それを承知のうえで、あえてこうした視点を提示したのは、歌謡と和歌とを直列的に縦に並べるのではなく、対立的に横に並べてみることによって、文学史のダイナミズムによりよく目がとどくことになりはしないか、という思いによったからである。言うまでもなく、古代和歌が集団歌謡に交錯し、そこから種々の要素を継承しつつ形成されてくるものであった点は、無数の例証を以ていろいろに確認されるであろう。それはそれとして否定し去るつもりはない。むしろそうした事例の検証は興味深い。和歌という古典詩の形態が、実は基本的にそうした歌謡性に親密で、相互に交錯しあうものであったことも、また確かである。しかしながら一方で、万葉という古代和歌が、たといその一部に擬似的に歌謡的集団歌唱性というようなものを持つ場合があったとしても、本来のそれは異った、和歌文芸としての自立性に立脚する歌の世界であることも、基本において確認されていなければならないであろう。

(注)

- 『文学史研究』3所収。この部分は有精堂版日本文学研究資料叢書『万葉集』Ⅲにも収載されている。
- 『文学・語学』82所収。
- 鬼頭清明『日本古代都市論序説』
- 土橋寛『古代歌謡と儀礼の研究』第六章第二節は、歌垣が神事的性格を持つのはその歴史の途中においてだとするが、いまこう書いておくのは、ややこれに疑念を感じるからである。歌垣というふうな遊樂的性格のものが、原初からして何らかの神事・祭式的象徴性を附帯させ

ずにはありえなかつたらう、という思いを制しがたい。
5、古代文学会の第四回古代文学講座（昭50・11）における講義「民衆と

五、古代文学の終焉

——靈異記説話の出現——

ここでいう〈古代文学〉の範囲は、一般的な文学史の時代区分でいえば、上代とか古代前期とか呼ばれている時代に含まれる文学をさすものであり、現存文献でいえば、古事記・日本書紀・風土記・万葉集などを中心としたものである。それが、本特集を企画した『古代文学』編集部の意図でもあらうし、私がかろうじて義務を果しうる限界でもある。そして、このように限定しても、なおかつ『古代文学の終焉』というテーマにどう立ち向かえばよいか、視点を定められずに悩んでいる。このテーマを与えられるまで、〈終焉〉という視座で古代文学を考えたことなどなかったからである。以下述べてゆくことは、私が考え得たこととまじりない素描であることをお断りして、古代説話（ウタに対する散文伝承をひとまず便宜的にこう呼んでおく——ここでは書かれたものを対象としてゆくのので〈散文〉という言い方も許されると思う）における〈終焉〉について考えてゆく。

十世紀以降の物語文学と古代説話との質的な違いや断層をみると、確かに古代文学の終焉ということは意識せざるをえない。たと

恋」

三 浦 佑 之

えば、異郷と人間との関わりを対象にしているという意味で並べることの可能な、垂仁記の多遲摩毛理伝承と『竹取物語』のくらもちの皇子の物語とにおける、両者の違いを思い浮べてみる。タヂマモリは呪的世界を背後にもって常世の国への往還を果す。その結末が〈死〉であることによつて異郷は人間の往還を本質的には否定しているとしても、呪性が人間を人間ならざる存在にする力をもつものとして描かれているということにおいて、古代説話の一つの典型とみてよい。一方、くらもちの皇子はどうか。かぐや姫の要求を満たすためのたくらみの狡猾さと、姫と爺との前で蓬萊山往還の「大うそ」を得意気に語るしたたかさなどが、くらもちの皇子のもちえた力なのだといつてよい。それこそ、人間の力といえる。経済力と権力とに裏打ちされた現実を背負った人物だといつてもよい。象徴的ないい方をすれば、ここにあげた二人の人物の間に横たわる溝こそ、古代説話と物語文学との溝だと考えることができる。換言すれば、両者のはざまに古代文学の終焉は見つけられるはずなのである。それはもちろん、歴史的な時間の問題ではない。人間をどのように描くかの問題である。

記紀風土記など文献に残された古代説話は、七世紀以前の世界を